



ベストイレブン



磐田 匠

走っても、走っても。

追いつけないボールもある。

手が届かないボールもある。

でも...

走ってみなければ、自分が追いつくのか、本当に手が届かないのか分かりはしない。

走る前にあきらめちゃいけない。

走ってみなければ結果はでない。

『僕』は『その日』の君に、それを伝えてあげたかった。

*

「俺にとってのベストイレブンいうたら... そやなあ... 俺らが高二のときのメンバーかなあ。

背番号一、キーパーは高三の石田さん。

背番号二と三、バックスは三年の相原さんと一年の赤西。

ハーフは右から竹口、山内さん、武森さん。背番号は四から六。センターハーフはチームの司令塔やからね。ヤンチさんがベストやな。

つぎはフォワード。ライトウィングは門口さん。あの人、もと陸上で足があるからね。ライトインサイはやっぱり船木さん。フォアセンは石岡さん。レフトインサイは一年の藤井やな、悔しいけど。七、八、九、十ときて... 最後の十一人目。

最後の一人は... 微妙やね。俺か、お前か」

1

木枯らしの色の風が吹きぬけた。

「森沼、お前、あんまりウマならんなあ...」

キャプテンのヤンチが言った。

嶺南中・高ホッケー部。兵庫県下にたった一つだけの高校ホッケー部。それが森沼真二の所属するチームだ。真二は昨年、中学三年生の秋からチームに加わった。

中三の秋に運動部に入部するなど、普通の学校では考えられないが、真二たちにとっては変なことでも何でもない。

真二の学校は中高一貫教育の私立学校。中学から高校にかけての入試はない。二年から三年に進級するような感覚で、同級生のほとんどが中三から高一に上がる。部活の練習も中高合同。中学三年生の秋という時期は確かに中途半端ではあるが、この学校では中学のどんな時期からでも部活をはじめることができるのだ。

ただ、真二はこれまで真剣に球技をやったことがなかった。

小学校時代から校庭ではあまり遊ばず、教室で絵を描いたり読書したりしているようなタイプだった。

いや...

そんな真二だからこそ『ホッケー』を選んだのかもしれない。

アイスホッケーではない。フィールドホッケーとかグラウンドホッケーとかの名前で呼ばれるスポーツ。

県には中学高校はもちろん、大学チームも嶺南大学と六甲大学にしかない。

チームは兵庫県下に七つ。嶺南の大学チーム、大学OBチーム、高校チーム、高校OBチーム、中学チーム、六甲大チーム、六甲大OBチーム。

嶺南か六甲大の同窓生くらいにしかその存在を知られていないようなスポーツだから、野球やサッカーのように少年時代からホッケーをやっていたような奴はいない。少なくとも兵庫県には。

みんな中学からのスタート。

このスポーツなら中三からでも間に合う。

真二は同級生の竹口から二年半遅れて入部した。

ヤンチが言う。

「ホッケーもなあ、何故かを考えながらやらんとあかんで。『なぜかの理論』や」

「はあ」

ふざけているのかまじめなのかよくわからない、禅問答のような説明が続く。

「相手のディフェンスにつかまるのは何故か。パスが相手にカットされるのは何故か...」

それは僕が下手だからです。そう言ってしまうとどんなに楽だろう。

高一になってから、ヤンチはやたらと真二に声をかけてくる。

目をかけてくれているのだろうか？

「よくわかりません」

「知りたいか？」

「はあ」

「腰にあるんや。腰の高さとフットワーク。へへへ。しっかり練習せい」

よくわからない。

腰が高い。

姿勢が悪いということなのだろうか。

ヤンチはボールをドリブルしながら同級生たちが話し込んでいるあたりにチョコチョコと走って行った。

自分に刺激されたかのように少し遅れて入部した『後輩同級生』、そしてあっという間に自分に並んだ『後輩同級生』たち。

中二まで剣道部だった高木。中一の終わりまでサッカー一部にいた氏沢。そしてテニス部を半年で辞めた友藤。

新高一は真二と竹口をあわせて五人。

高三は一人もいなくて、高二は七人。

高校の部員は十二人。しかしレギュラーは十一人。

この中から...誰かがレギュラーから落ちるんだなあ...

発表とかはされていないけど、恐らく高木はレギュラー確定だろうな...

あいつの運動神経にはかなわない。先輩にも好かれてるし。

氏沢と友藤は微妙。

三人の中から誰かが補欠になるんだろうな...

春合宿が終わるところから真二はそういうことを意識しはじめていた。

四月の風はまだ冷たい。

同級生たちは寒そうにジャージのポケットに両手を突っ込んで何やら話している。短パンで練習しているのはヤンチと真二くらいだ。ヤンチが近づくと、三人は慌ててドリブル練習をはじめた。

やっぱり足動かさないと寒いなあ...

フットワークか...

真二はボールをドリブルするヤンチの動きを真似てみた。

「あ...」

ボールはすぐに真二のコントロールを離れて、ゴールポストに向かって転がっていった。

「集まる」

ボールを取りに行こうとした真二の背中の方でヤンチの声がした。

練習が始まる。下級生たちがゴール前のボールを集める。

部員たちが駆け足ゴール前に集まる。真二もすぐにチームの輪に向かって走った。

真二が使っていたボールはいつまでもゴールポストの裏に残っていた。

*

いつのまにかグラウンドに漂うのはつんとするような冬の匂いからから青くさい春の香りに変わった。

「しかし森沼、お前のストローク、相変わらずもひとつやなあ...」

今日もしかめっ面でヤンチが近づいてくる。

一学期の中間考査が終わった。ジャージを脱いでTシャツ短パンで練習していてももう寒くない。

一日の練習が終わり、部員たちはそれぞれ練習したり、喋ったり、遊んだりしている。

真二は全体練習が終わると、一人でストロークの練習をする。

先輩たちも、OBも... へろへろのボールしか打てない真二にいろいろとアドバイスをしてくれる。ほとんどみんな、野球のスイングを例に出してストロークを説明する。しかし真二は子供の頃からほとんど野球をやっていない。いや、野球を避けて通ってきたに近い。

だからわからないのだ。ストロークというやつが。

走るだけなら何とかなるけど...

走って、ボールを止めて、必要なら相手のディフェンスをかわして、味方にパスを出す。

そのための『ボールを打つ』ことがとにかく苦手なのだ。

運動センス抜群の高木と足がある氏沢はゴール近くで遊んでいる。

氏沢はたった半年でびっくりするほど巧くなった。レギュラー『ほぼ当確』、といったところだろう。

学年キャプテンの竹口は先輩と『戦術レベル』の打ち合わせ中。

高木・竹口・氏沢と比べて技術ではやや劣る友藤は後輩たちと喋っている。

ヤンチは友藤のほうをちらりと見て、言った。

「あいつまた喋るとるわ。ドリブルの練習くらいしたらええのに」

キャプテンという立場からみれば、友藤のことが少しはがゆいのかもしれない。

真二でさえ思っていた。あいつ、練習したらもっと上手くなるのに。

友藤が他の同級生たちより技術的に劣っているのは真二も感じている。練習のとき、上級生は当然として、竹口や高木、氏沢と組んだほうがやりやすい。友藤のどこがどう悪いのかまではわからないが...

でも真二は友藤には『もっと練習するべきだ』と言えない。

チームのためにはそう言うべきなのだろうが、言えない。

友藤が上手くなると... 自分がレギュラーになれない。

卑怯だとわかっているのだが... でも、真二には言えない。

ヤンチは真二のそんな思いを見透かしたように言った。

「おい、森沼。お前、ディフェンス覚えろ。高木と氏沢と友藤はフォワードでいくつもりやから。お前がこのままへたくそやったら高木を下げる。そうせんとお前、今年出番ないぞ」

ディフェンスを覚えなければ出番はない。

ということはディフェンスを覚えれば真二にもレギュラーのチャンスがあるということだ。

ニヤリと笑ってヤンチは部室棟のほうへ歩きだした。ヤンチの向こうに春の空が見える。空には赤みがかった雲がふたつ浮かんでいた。

*

その年のインターハイは、同じ近畿ブロックの京都府での開催だった。京都代表のチームは無条件で出場。そのため近畿地区はブロック予選が行われず、チームは県代表としてインターハイに出場することになった。

梅雨時だというのに珍しく晴れた日。そんな日の朝、とんでもない知らせが飛び込んできた。

「えらいこっちゃ。昨日、フナっさんが事故ったらしい」

竹口が鬼のような形相で言った。

フナっさん... 船木さん。

ライトインサイド。攻撃の中心になる人。

「バイクで事故って、骨折らしい... 命には別状ないみたいやけど...」

「インターハイまでに直んのか？」

「無理にきまってるやろ」

「どうすんねん... 試合... あの人のぬきでやらなあかんのやろ？」

「そのへんはヤンチさんと石岡さんで考えるみたいやけど...」

始業を告げるチャイムが鳴った。何か言い残したような表情で竹口はクラスに戻った。

ヤンチたちがどのような結論を出すのか、竹口も真二もまだ知らなかった。

部室には思っていたよりサバサバした表情の先輩たちがいた。

「練習前にグラウンドでミーティングするから。早めに外に出とけ」

ヤンチはそれだけしか言わなかった。

どんよりした気分でグラウンドへ出る。

嫌になるくらい晴れている。こんな日くらい曇ればいいのに。真二は思った。

高一の真二たち五人が外に出てすぐ、高二のヤンチたちが揃って姿を見せた。

「高校、集まる」

ヤンチが言った。

きっちり十一人の高校ホッケー部が集まった。

「みんな、もう聞いてると思うけど、船木がバイクで事故った。足首んとこ骨折したみたいや。インターハイに間に合うかどうかわからんけど、一応、最悪のこと考えてポジション考えたから。ライトインサイ... 船木のところは高木に入ってもらう。レフトインサイは友藤。レフトウイングは氏沢な。ライトハーフは森沼。これでいくから。で、一年。今日から各ポジションの特訓。基本的にはスリートップ以外は守備。徹底的に守って、スリートップの三人でカウンター攻撃。これしかないねん。高木に竹口、森沼に武森、氏沢に石岡がついて徹底的に教えてやってくれ。友藤は俺が教えるから」

隣に立っていた元陸上部の門口が厳しい顔で空を見上げた。

「雨、降るかもな」

真二は門口を見た。

「こういう湿った風が吹いたら雨が降る。うちの田舎ではそうや...」

真二は空を見上げた。多少の雲は出ているが、雨など降りそうにない。

「よし。声だして行こ」

ヤンチが言った。

十一人はそれぞれのポジションに散っていく。

ライトハーフのポジションに走りながら、真二はやっと気づいた。

門口さんはケガした船木さんの一番の親友だった。何をするのも二人は一緒だった。

なぜ門口さんがあのタイミングで空を見上げなければならなかったのか。

雨はきっと降らない。

こうして真二と友藤は、ポジションを争うことのないままインターハイを迎え、そしてチームは初戦で敗退した。

試合までに色々なことがあって...

合宿して、練習試合して、夏休みの二部練習して...

しごかれて、走らされて、転んで、数えきれないくらいの小さなケガをして...

で、汗流して。それが気持ちよくて。

でも、今年のチームが通過点であることはみんな知っていた。

真二も今年のチームがベストであるとは思っていなかった。

そして真二は... 自分が現在の、そして来年のチームのレギュラー十一人に入っているとは思っていなかった。

もし... 友藤とレギュラーを争ってたら... 勝てたのだろうか。

船木さんのことがなかったら... 俺はインターハイに出ることができていたのだろうか。

誰もその答えはくれなかった。

「なあ、お前、覚えてるか？俺らの高一んときのインターハイ。船木さんがケガした年。開会式で大雨が降って、ずぶ濡れになりながら帰ったとき。あんとき帰りに喫茶店に行ったやんか。そのときやで、高木と氏沢がインターハイ終わったら部活やめるって聞いたの... なんかショックやったんだけ覚えてるわ。実はなあ、俺、そんなときちょっとだけ思ったんや。今やから言えるけど。お前もやめたらええのになあって。ゴメンゴメン。でもな、高一のときからお前、ずっと俺のライバルやったやん。二人同じくらいのドヘタやったけど、どっちも自分のほうが上手いって思ってたやん？ここだけの話やけど...俺な、お前のこと、苦手やってん。なんか要領良いプレーするやろ？あんまり走らへんのに、ええところで得点あげたり、全然足動いてないのに相手のドリブル止めたり。なんか俺って必死でやるのが売りやったやん。でもお前はあんまり必死にやらへんキャラやったやん。これ貶してるんとちゃうで。そやから、ぶっちゃけ、高木らがやめたとき、お前もやめたらええのになあって思ってた時期あったで。だから...そんなお前と同じポジション狙うっていうの、実はごっついしんどかってんで...俺的には...」

2

ぱん、という音をたててボールが弾け飛んだ。

ボールはゴールポストに当たり、大きくはじけて飛んでフェンスに当たった。

「しっかり打てこら」

キーパーの石田が言った。

これってキーパー練習のはずだけど。逆にキーパーに怒鳴られている。相変わらずうまくいかない。ボールを打つことが。

真二は自分の後ろで待っていた友藤をちらりと見た。

「惜しい惜しい」

友藤だけには言われたくない言葉だ。

キーシバ。

キーパーをしばく、という意味らしい。

右ウイング、右インサイド、センターフォワード、左インサイド、左ウイングの順番に、それぞれのポジションからシュートを打っていく。シュートの間隔が短ければ短いほど、キーパーはきつい。さっきみたいにシュートを外すと、キーパーの練習にならない。

門口、春から復帰した船木、石岡、一年の藤井の順にゴールにボールを打ち込んでいく。

レフトウイングからのシュートだけは真二と友藤が交互に打つ。

今の二人の立場を象徴するような配置だ。

右ウイングの門口の打球を止める。右インサイド船木のヒットが鎧のようにも見えるキーパーレガースをかすめてゴールに突き刺さる。ペナルティエリアトップからキーパー正面に飛んだ石岡の球を弾き飛ばす。スライス気味にやや浮いた藤井の打球をハンドストップし、落ちた打球を

スティックで左サイドにクリアする。

石田はキーパーとしては最高だと真二は思っている。

かといって誰か他のキーパーを知っているわけではないのだが。

ホッケーのキーパーは身体のどこを使ってボールを止めてもいい。

他のプレイヤーはボールを足に当てると反則をとられるが、ペナルティエリア内のキーパーはだけは例外だ。

野球のキャッチャーのような胸防具と、ロボットのように見えるキーパーレガース。

顔をガードする『ホッケーマスク』。

去年...

去年、ディフェンスの真二はペナルティコーナーのときはゴールに入るストッパーだった。

真二の顔面に向かって飛んで来るボールを飛びついて止めてくれた石田。

真二は一步も動けなかった。よけることさえできなかった。

石田はそんな真二の顔を見て、へへと笑った。

今年の石田にはそんな柔らかさがない。

去年より数段、動きが鋭い。

そんな石田に友藤がボールを打ち込む。

ガツン、とダフった音。

弱々しいボールが石田の正面に飛んだ。

重装備のキーパーはボールに向かって悠然とダッシュし、ボールを打ち込んだ友藤の方向にボールを蹴り返した。

「友藤... 走ってこい」

『キーシバ』を黙って見ていたヤンチが言った。

やる気のないプレーや全体の流れを読まないプレーをすると罰として走らされる。

チャンスの局面でそれをつぶすようなプレーをしても同じ。

部員みんな、それを当然のことと思って練習している。

キーパー練習なんて、キーパーに圧倒的に不利な状況で行う練習だ。

ディフェンスの最終ラインが突破されて、キーパーとフォワード一対一。

キーパー一人対複数のフォワード。

そんな状況で、シュート外したりへろへろのシュートを打ったりする選手など、走らされても文句なんか言えない。

友藤はどこか薄笑いをうかべたような表情で走りはじめた。

こういうところ、良くない。真二は思った。

必死に走っているように見えない。罰で走らされているように見えない。

友藤はすごく照れ屋で、自意識が過剰で。あの表情はほとんど自嘲的なもので。そういうところを差し引いても、やっぱり良くない。

走る友藤の後ろ姿が、ベースランニングする野球部員の陰に隠れた。

パン。

船木のスティックがボールにヒットする音。

タン。

藤井がゴールめがけて打ち込む音。

真二の番だ。

ドリブルでボールの速度をコントロールしながら、自分はボールを中心に大きく回り込み、自陣側を向く。

フィールドホッケーのスティックはゴルフクラブのように片面だけしか使えない。このあたりがアイスホッケーやローラーホッケーと大きく違う点だ。

右利き有利。ライト攻撃有利。

ライト側からのセンタリングは普通のドリブル動作から移行できるが、レフト側からはスティック面をひっくり返して左打ちするか、回り込んで右打ちするかしかない。

振りかぶり、ゴールめがけてシュートを打ち込む。

がつ。

ダフった。

さっきの友藤の球よりも力のない打球は、さらに悪いことにキーパーの五ヤード以上手前でラインを割った。

最悪。

「宮森、レフトウイングに入れ。森沼... 走ってこい」

当然のようにヤンチが言った。

一年の宮森が慌てて準備をはじめめる。

真二はグラウンドを走りをはじめめる。

俺や友藤がいなかったら、宮森がレギュラーだったんだろうな。真二は思った。

でも。

宮森は友藤と似たようなタイプのプレーをする。

必要のないところでは走らないタイプ。追いつけないと思ったボールは追わないタイプ。ミスすると悔しがらずに笑うタイプ。

今年レギュラーをとった同じ一年の、ディフェンス・赤西やフォワード・藤井とはそこが決定的に違う。

だからレギュラーをとれないのだ、とは真二には言えない。当の真二が『そういうタイプ』の友藤とレギュラー争奪戦を繰り広げているのだから。

五月の風。夕方の日差し。

全色の世界に少しずつ赤が混ざっていく。

レフトウイング。去年氏沢が入っていたポジションだ。

氏沢や高木が苦労したり苦心したりしている姿を、真二は覚えていない。

そういう姿を見せないように陰で練習していたのか、真二と彼らとではそもそもセンスが違うのか... 真二にはわからない。

インターハイが終わってすぐ、二人は後輩たちにポジションを譲るように退部した。

まるで去年一年間、試合出場に人数を合わせることだけが目的だったかのように。

氏沢は軽音楽部に入ってドラムをはじめた。

高木は物理研究会に入った。

やりたいことが見つかったからホッケーをやめたのか、ホッケーをやめたから他の何かを探したのか... 真二にはわからない。

ただ、少なくとも真二には、彼らのように下級生にレギュラーを譲るような辞めかたはできない。

たまたま始めただけの、このホッケーというスポーツが好きになりかけていたから。

カッコ悪くても、みじめでも、しがみついていた。

下手でも、できることならレギュラーになりたい。

十一人中、十一番目でもいいから... このチームでインターハイに行きたい。

だから。

だから？

真二は先を走る友藤の背中を見つめた。

『悪いけど、負けられない』

真二はライバルに向かって走り出した。

友藤も真二が走り出したことに気づいたようだ。

走るペースが少し上がったように感じる。

チョロシュートを打った二人は、練習が続くグラウンド外周を走り続けた。

*

インターハイ予選を兼ねた近畿地区高校ホッケー選手権大会が開かれたのは、五月の下旬だった。

会場は奈良県の飛鳥大学。飛鳥市は知る人ぞ知るホッケーの町だ。

飛鳥大学で教鞭をとられている本田先生は、国内ではホッケー指導の第一人者。

日本全国の強豪高校のホッケー選手たちが、先生の指導を受けたくて飛鳥大学に入学してくる。当然、飛鳥大学は無敵だ。大学リーグ戦では常勝。真二が知る限り、飛鳥大学が負けたという話は聞いたことがない。嶺南大学のホッケー部は、関西学生の一部リーグにはいるものの、ここ数年飛鳥大学には勝っていない。

いつか... 自分も大学ホッケー部のユニフォームを着ることになるのだろうか。

先輩たちはどうするのだろうか。キャプテンのヤンチ、キーパーの石田は当然として、ほかの先輩たちも大学でホッケーを続けるのだろうか...

会場には各県の代表チームが既に揃っていた。滋賀の長瀬。京都の春葉。和歌山の和歌浦。奈良の飛鳥。そして大阪の薬師寺。

最下位の府県がインターハイ出場を逃す。

最低でも一つ。できれば二つ勝つ。

まず予選。三ブロックに分かれ、一回戦を戦う。一回戦を勝てばその時点でインターハイ出場が決まる。勝った三チームは勝者どうしで、負けチームは敗者どうしで巴戦。勝ち組は優勝をかけて戦う。一回戦に破れたチームは順位決定の巴戦で二勝すれば出場。全チームが一勝一敗なら得失点差で残る代表二校を決める。そして二敗、つまりこの大会で一勝もできなかったチームはインターハイ出場を逃す。

兵庫の嶺南チームにとっての最大のライバルは大阪。大阪も兵庫同様、ホッケーチームが少ない。高校ホッケーチームは薬師寺高校と星法高校の二校。この両校は実力が拮抗している。そしてこの大阪の二校は、真二たち嶺南チームが練習試合を申し込むことができる数少ないチームだ。

今年のチームではそれぞれ二回ずつ対戦している。薬師寺高校には一勝一敗、星法高校には二勝というのが戦績だ。

今の時点では。

薬師寺高校と最後に練習試合をしたのは去年の秋。そこから彼らがどれだけ変わっているのかわからない。

それでも...

勝たなければならない。

最下位のチームは今日のメンバーでは二度と戦えなくなる。

組み合わせ抽選で大阪代表とは別ブロックとなった。

嶺南チームの初戦の相手は長瀬高校。

この大会の常連校だ。もっとも滋賀県のホッケー事情まではわからない。この試合までに彼らがいくつ勝ってきたかも。

プログラムを見る限り、三年生中心のチームのようだ。

ライト攻めの嶺南と違って、センターフォワードと両インサイドが三年。中央突破の攻撃パターンでくるかもしれない。石田やヤンチが話し込んでいる。

真二は相手の戦力分析もそこそこに、自分のチームのページをめくった。

嶺南高校。

自分の名前を探す。

背番号十一。森沼真二。

スタメンだ。

真二も友藤も、もちろん宮森も、誰がレギュラーで誰が控えかなど知らされていない。

キャプテンのヤンチも、監督もコーチも... 決めかねていたのかもしれない。

直前まで様子を見て、コンディションの良い選手をスタメンで起用する。そう聞かされていた。ただ... 真二にとって『背番号』は重要だった。

先輩たちはエントリーの瞬間に誰を使おうとしていたのか。

背番号十三。補欠。友藤博。背番号十四。補欠。宮森秀樹。

それが三人の評価の全てではないのかもしれない。

しかし... 真二が友藤や宮森に『勝った』瞬間があった。

そうであって欲しかった。そうであると思いたかった。

「森沼と宮森。ユニフォーム交換しとけ」

ヤンチが言った。

真二の背番号は十四。宮森の背番号は十一。これが入部のときにもらった背番号だ。試合のときだけユニフォームを交換する。

二人は黙ってユニフォームを交換した。微妙な空気だ。宮森が一番悔しいだろう。宮森が一番このユニフォームを着たいだろう。

背番号十一の半袖ユニフォームから出た腕を五月の空気がかすめていった。

*

その日の午後にもなると、日差しはかなり強いものになっていた。

ともに午前の試合、第一回戦の敗者。兵庫・嶺南高校と大阪・薬師寺高校の選手たちが本部席前に並んだ。

「リングパス行います」

審判が言った。

内径十センチほどのリング。輪というよりは円盤だろうか。ホッケーではこのリングを通るスティックしか試合で使用することはできない。歪んだものや、曲がったスティックはここで使用不可とされる。このリングを通っていないものは使用できないルールだから、補欠選手のものや予備用を含めた全てのスティックが検査される。

「リングトス行います。ジャンケンで表か裏を決めてください」

ヤンチと薬師寺のキャプテンがジャンケンをする。

午前中の第一回戦、嶺南は善戦の末、滋賀・長瀬高校に惜敗。

前半はどちらも決定力に欠けて無得点のまま折り返し。後半開始四分、滋賀チームのシュート。ディフェンスの赤西がはじいたボールがエンドラインを割ってペナルティコーナー。そこから得点を許した。逆転を狙っての攻勢。圧倒的にボールを支配しながら、シュートに結びつかなかった。一対0。

しかし負けは負け。

敗者復活の巴戦は大阪、兵庫、奈良で戦うことになった。

奈良の飛鳥が京都春葉に負けたのは意外だった。ヤンチたちの戦前の予想では大阪・京都と滋賀が負け組だった。

試合順は大阪対兵庫、兵庫対奈良、大阪対奈良。

ヤンチが大阪チームの主将と握手する。

センターラインに整列して礼。円陣を組む。

「勝つぞ」

一言だけヤンチが言った。それに応えるような気合の声。

チームのみんなが各ポジションに散っていく。

すぐ横には一年の藤井。後ろには三年の武森。ユニフォーム姿のチームメイトはいつもより頼もしく見える。

空を見上げた。

日差しが強い。

今日は暑くなりそうだ。

審判が長いホイッスルを吹いた。

試合開始。

ホッケーではバスケットのように試合開始時にボールをとりあう。ブリーオフという動作だ。地面と相手のスティックを交互に三回ずつ叩き、それからボールを奪い合う。

かつん、かつん、かつん。

石岡のスティックと敵センターフォワードのスティックが当たる音。

ボールの取り合いが始まった瞬間、真二はベストポジションに走り込む。

石岡がボールを取る。そして敵フォワードを抜き去り、藤井にパス。

藤井はすぐに石岡にボールを返す。

真二の走りは陽動だ。

パスなんて来なくてもいい。得点しなくても、アシストしなくてもいい。

一試合、一度もボールにさわることがなくてもかまわない。

走って、走って、走って。

動き回って。

相手がそれにつられて慌てて、真二をマークして。

それがこの試合での真二の役目だ。

真二を相手のライトハーフがぴったりとマークしている。

インサイドがディフェンスに回っているということだ。

守りを重視した布陣。去年の自分たちの戦いかたと同じだ。

守って、守って、我慢して... カウンターを狙う戦法。

悪いけど、俺って困なんだ... でもさ、つきあってもらうよ。一緒に走りまわろうぜ。

真二は相手の虚をつくように、逆サイドにダッシュする。相手ハーフも必死でついてくる。

もう一度。

まだついてくる。

石岡はボールをキープしながら門口へのパスコースを探っている。門口にボールが渡ればこちらの攻撃パターンだ。

「藤井、走れ」

真二の声で藤井がダッシュする。相手の右インサイドの選手をひきつけて。

「森沼さんチェンジ」

藤井が叫ぶ。

そのとき、石岡からのパスが門口に渡った。

門口がドリブル。元陸上選手の足についてこられる選手はそうはいない。

真二はレフトインサイドのポジションに走り込む。相手ディフェンスもサイドチェンジ。今度はライトインサイドが真二のマークに替わる。

「はい、左に入った」

門口と並走しながら逆サイドの藤井が叫ぶ。

オフサイドぎりぎりの位置には石岡。

『足』で相手を抜き去った門口がセンタリング。

ボールは無人のペナルティエリアのトップへ。

ホッケーではシューティングサークル（ゴールを中心に描いた十五メートルほどの半円）の中からのシュートしか得点として認められない。

半円の頂点あたりにヤンチが走り込む。

フォーメーション練習でそれぞれの身体に叩き込まれた動きだ。

藤井の動きも石岡の動きも無駄な動きではない。相手の守備側の動きを判断して、門口がセンタリングの角度を変えているのだ。

ヤンチは完全なシュート態勢に入った。キーパーが身構える。

同時にフルバックがヤンチめがけて飛び出す。

ひょいとヤンチがボールを右方向へひっかけた。

ヤンチに少し遅れ、走り込みながらシュート態勢に入っている船木の正面にゆるいボールが転がる。

フェイント。ゴールに入っているキーパーには反応しきれない。飛び出してきた選手はヤンチの目の前であっけにとられたような顔をしている。

船木のランニングヒット。

痛烈な打球はゴールポストをわずかに外れ、エンドラインを割った。

「惜しいよ」

ヤンチが笑いながら船木に言った。

船木は苦笑いしながらポジションにもどっていく。

不思議な感覚だった。

フォーメーション練習でも、練習中のミニゲームでも...

いつも同じチームのメンバーが敵味方に分かれて戦う。

今日は違う。十一人全員が味方だ。去年はこんなことを感じる余裕がなかった。

この十一人が負けるはずがない。

俺たちは勝つ。

ホイッスルから五分後、真二は半ば確信していた。

*

「薬師寺のやつら、泣いとったぞ」

監督のタケさんが言った。

帰り支度をしている手を止めて、みんなが監督の顔を見つめた。

近畿ブロックの中で一校だけインターハイに行けない高校がある。それが兵庫の嶺南ではなく、大阪の薬師寺だった。

練習試合のとき以上に、思っていた以上に、薬師寺高校は強かった。でも、嶺南はもっと強かった。そういうことだ。

他人事ではなかった。真二は何故か来年の自分たちを想像した。

ヤンチさんたちの抜けたチーム。

石田さんも船木さんも石岡さんも門口さんも相原さんも武森さんもいない。

大阪は来年、もっと強くなって来る。打倒嶺南。

でも彼らを破ったチームはもうそこにはない。主力メンバーが抜けて、今中三の選手たちがどっさり入った経験の浅いチームになる。

きっと... 来年は勝てないだろう。大阪には。

真二はそう思った。他の誰にも言うことはないだろうけれど...

嶺南に負けた後、薬師寺チームは、兵庫対奈良の試合の間、かなり長いミーティングと練習をしていたそう。

真二たちが飛鳥高校と戦っている間、ずっと。

きっと大阪は奈良には勝てない。ゲームをしながら真二はそう思っていた。

守備の厚さが全然違う。ボールにくらいついてくる執念のようなものも。

嶺南は飛鳥相手に一点をもぎとった。しかし二点を失って、そのまま試合が終了した。

一勝一敗。

奈良戦が終わってすぐ、ヤンチはみんなを集めた。

「軽く体操して、着替えて帰る準備しとこ。まだインハイ行けるかどうかは確定してないけど。とりあえず薬師寺と飛鳥の結果待ちやから」

体操して、ボールを集めて、帰る準備。

みんなわざとゆっくりと着替えているように感じた。時間の流れが妙に遅く感じた。

重装備の石田が着替え終わった頃、薬師寺高校が負けた。

試合を見に行っていたヤンチと石岡が戻ってきた。

「とりあえずインターハイ、頑張ろ」

ヤンチはそれだけしか言わなかった。

残りの選手たちも何も言わなかった。

全然知らないチームじゃない。何度か練習試合をしている学校だ。

みんな黙って帰り支度を続ける。石田がサンドバッグのようなキーパーレガースを肩にかつぐ。それが合図であるかのように、全員が鞆を持った。

今日までは大阪に勝つことが目標だった。その大阪に勝ったというのに、チームの誰もが黙り込んでいる。

真二たちはグラウンドの横を通った。試合を終え、ユニフォーム姿でひきあげる薬師寺高校の選手たちとすれ違う。真っ赤な目をしている選手が高三だろうか。

「お疲れ」

「がんばれよ」

「ありがとう」

短い言葉が交わされる。

もし、来年。

彼らと戦って、勝てなくて。そしたらそのあと。

泣くのは我慢しよう。

そして対戦相手とすれ違ったり、鉢合わせしたり。

そんな状況は避けよう。

できることなら。

黙って歩きはじめた竹口や、後輩と話しながら歩く友藤の背中を眺めながら、真二はそう思った。

夕方の白い闇のカーテンが、黙り込んだ勝者たちの上に降りようとしていた。

「俺らの最後のインターハイ... 高校二年のとき徳島でやった試合... あれが『あの十一人』の最後の試合になってもたな。もちろん俺とお前とで半々しか試合には出てないけど。せやからフルタイム出場したインターハイって、俺らにとって高一んときの京都の試合だけやってんで... 今まで気づかんかったけど。中三の半年は別として、高校三年間、必死こいてホッケーやった結果がまあ、これやったということやんな、お互いに。でもな、俺、思うんや。うちの部がたまたま兵庫にひとつしかない高校ホッケー部やったから、ちょっと背伸びしたら届くところにインターハイがあっただけや。もっとも俺らの学年は背伸びしそこなってこけてもたけど。でもな、だからといって俺らがホッケーやってた三年間の気持ちがぬるかったとか甘かったとか、そういうことではないと思うねん。必死やったやん、みんな。本気やったやん、みんな。でも手が届かんかった。そういうこともあるねん。それでええねん。だから俺らが高三の年のインターハイは、予選で負けてむしろ正解やったんやと思うわ。頑張ってもあかんときもある。そういうことをホッケーが教えてくれた、みたいな。...かっこよすぎるかな。てかな、やっぱり、B級やってんな。俺も、お前も」

3

少し赤が混じった黄土色のグラウンドから熱気がたちのぼる。

その日、真二は十七歳になった。

嶺南高校のメンバーがグラウンドに立った。

第三グラウンド。第二試合。そこで真二たちにとってのインターハイ初戦が行われる。

第一試合が終わり、グラウンドが整備される。

ホッケーのボールは飛ばさずに転がす。一定の高さ以上に浮いたボールを打つと反則をとられる。そのため、整地が不十分だとイレギュラーバウンドを起こし、ゲームに支障をきたす。考えようによっては野球やサッカーなどよりも丁寧なグラウンド整備が必要だ。

嶺南ベンチ横に掲げられたエンジ色の部旗ははらりとも動かない。うだるような暑さ。

旗の色に合わせたエンジ色と白のストライプのユニフォームを着た部員たちが整備終了と同時にウォーミングアップをはじめます。

最初はヒットストップ。二人一組でボールを打って・止めてを繰り返す。

「集まる」

ヤンチが言った。

「ショーコー行こ」

部員たちはそれぞれのポジションに散る。

ショートコーナー。ペナルティコーナーともいう。

攻撃側の得点が認められる半円（シューティングサークル）の中で守備側が反則を行うと、ペナルティコーナーが課せられる。攻撃側がゴールから十メートルほど離れたエンドライン上か

らボールを出す。ボールが出されるまで攻撃側はサークル外、守備側はエンドライン外からサークル内に入ることはできない。

ボールを出すのは石岡。真二はボールが出るとすぐにキーパー前までダッシュする。キーパーがはじいたりバウンドボールを押し込むポジションだ。

地を這うようなスピードボールが石岡のスティックから飛び出す。ヤンチがボールを止める。ほぼ同時に船木がスティックを振る。音が聞こえそうな球がゴールに突き刺さる。キーパーの石田が一瞬遅れて反応する。石田が遅いのではない。船木のボールが速すぎるのだ。

その後、低い弾道のボールが五球ほどゴールに突き刺さり、やがて長いホイッスルが鳴った。ユニフォームを着た二チームの選手たちが本部席前に整列する。

相手は富山県代表の石堂高校。

リングパス。そしてリングトス。

間近に見る対戦相手。

濃い紺のユニフォーム。

どうしてこんなに強そうに見えるのだろう。

同級生だっているだろうに。

真二には相手チームの十一人全員が年上に思えてならない。

それぞれのチームの補欠選手がテントに下がり、スターティングメンバーの十一人が円陣を組む。

「勝つぞ」

短くヤンチが言った。

全員の気合の声。

五月の薬師寺戦のときと同じ言葉。そして同じテンションの気合の声。

今回も勝つ。みんなそう思っている。

十一人がそれぞれのポジションに散らばった。

頭の上から、とんでもない日差し。

足元からも、熱気。

立っているだけで体じゅうから汗が噴き出す。さっきのウォーミングアップだけでユニフォームは汗でべとべとだ。

主審がホイッスルを吹く。

ブリーオフ。

石岡と、相手チームのセンターフォワードがスティックをあわせる。

ボールが動く。今日はいつものように飛び出すことはできない。相手の力は未知数だ。

相手がボールを取った。ドリブル。追いつくように石岡が下がる。

ボールめがけて石岡が背後からスティックを出す。その瞬間、相手はスティックを反転させた。石岡のタックルはボールには当たらず、相手のスティックとぶつかって乾いた音をたてる。相手センターフォワードが素早く右手をあげた。すかさず審判が笛をふいた。

インターフェア。打撃妨害。

石岡のタックルを読んで、スティックでボールをかばい、反則を誘ってすかさずアピール。嶺南大学チームと練習試合をしたときに見たプレーだ。

ということは... つまり...

関西大学一部リーグのレベルなのか？相手は...

風は動かない。熱をはらんだ空気が真二の周囲に滞留している。

身体にまとわりつくねばっこい気体をふりはらうように真二は下がった。

反則のあった場所からのフリーヒット。

相手フォワードたちが嶺南側フィールドを走り回る。

ヤンチと赤西の間のスペースがわずかに空いた。

「ヤンチ縦危ない」

石田が叫ぶ。

ヤンチが石田の声に反応すると、相手右インサイドがそのスペースに駆け込むのが同時だった。

リーチいっぱい伸ばしたヤンチのスティックの二インチ先をボールがすり抜けた。

ボールにあわせて右インサイドが走り込む。

「赤西下がれ」

またキーパー石田が叫んだ。ボールを追おうとしていた赤西があわててゴール方向に下がる。

「相原さんお願い」

赤西の声とほぼ同時にフルバックの相原が出る。サークルエリアには逆ハーフの武森がさがってきている。

ボールは右から左へ。

右ハーフの竹口が出る。正面からプレッシャーをかけてタックル。

正面からの突破をはかった敵のボールを竹口が奪った。

「マイボ」

石田が声をはりあげた。

...マイボール。門口、船木、石岡、藤井が走る。もちろん真二も。粘りけのある汗が額から頬にかけて流れる。

ボールは竹口からヤンチへ。即座に敵センターフォワードの当たりが入る。

ヤンチがボールを取られた。

敵フォワードがキーパー石田めがけて走り出す。五人の味方フォワードの足が止まる。

ボールはセンターからライトへ。武森が出る。赤西は中央への戻しを警戒している。

敵インサイドが武森を振り切ってサークルトップまで入り込み、強引にシュート態勢に入った。

パン。

乾いた音をたててボールが飛んだ。

くらいつく武森に気をとられたのだろうか、ボールは石田の立つゴールから三ヤードほどずれてラインを割った。

こいつら、強い。

真二は思った。

大学チームと戦っているときのような重圧感。

攻撃も守備も段違いに層が厚い。カウンター攻撃も速い。

...負けるかもしれない。

息をすると暑苦しい空気が肺の中に流れ込む。

いや、俺たちが負けるはずはない。

真二は嫌な想像を振り払うように顔をあげた。雲ひとつない空。遠慮なしに照りつける太陽。

それでも試合はまだ始まったばかりだった。

*

試合はほとんど嶺南ゴール側で展開していた。典型的なワンサイドゲーム。

これまで得点が入っていないのが不思議なくらい押されている。

本来なら攻撃の最前列、レフトウイングの真二は、味方ボールになると走り、敵ボールになるとセンターライン近くまで戻ってパスを待つ。しかし今日は試合がはじまってほとんどずっと、センターライン周辺をうろうろしているような気がする。ボールに触ることさえなく四十分ハーフの三十分以上が経過した。

もう口の中はからからだ。

後から後から流れだしてくる汗で、ユニフォームはぐっしょりと濡れている。

味方の反則でプレーが止まった。

「森沼...」

武森が声をかけてきた。

「相手チーム、けっこう攻めてきてるから、お前ディフェンスに回れ。相手右ウイングマーク。マイボになったら走ってカウンター攻撃。ヤンチからの指示や」

「はい」

後退。敵ライトウイングのマンツーマンマークに入る。

絶対にライトサイドは抜かせない。

フリーヒット。セットプレー。

敵のセンターハーフがボールを置いて構える。

フォワードが走り回る。

武森は敵ライトインサイドに近いところをゾーンディフェンス。

ぱん。

ボールが出た。敵のレフトインサイドがボールを受ける。ヤンチがそいつに向かって飛び出す。一瞬早く、左ウイングへのパスが出た。

今度は左攻撃。

敵ライトウイングはいったいどんなパターンで動く... 左からのセンタリングを受けるか、キ

ーパー前でシュートのリバウンドを押し込むか。

どんな作戦で来るのかわからないが、シュートはさせない。パスも渡さない。

ボールを持った左ウイングが猛烈なスピードでドリブルする。

かなり足の速い選手だ。

そして走りながらエンドライン手前五メートルあたりのところでちょこんとボールをなでた。ボールは魔法がかかったようにその速度を落とした。走りながらボールに制動をかけたのだ。勢いがついた身体が速度の落ちたボールを追い越してから止まる。即座にセンターリング。

嶺南側のディフェンスはその動きについていけない。

ボールはシューティングサークルの頂点あたりに飛んだ。

敵右ウイングが真二のマークを振り切ろうとする。

真二は必死で追いつがる。

ディフェンスのほとんどは左サイドにおびき出されている。

ここで振り切られたらウイングとキーパーの対一。

不利だ。

このマークを外すわけにはいかない。

しかし...

次の瞬間、敵ウイングの身体が真二を追い越した。

え？ まずい。

真二は走った。

追いつかない。追いつけない。

必死で走っても。どれだけ走っても。

ウイングがシュート体勢に入る。

まるでコマ送りの映画を見ているように...

彼がスティックを振り上げ...

そしてそれを打ちおろし...

ボールは石田のレガースをかすめ...

ゴールに吸い込まれた。

得点を告げる主審の長い長いホイッスル。

重い一点が入った。

「ドンマイ」

武森が言った。

「まだ前半やぞ。返せる返せる」

ヤンチが言った。

十一人がゆっくりとポジションに戻る。

試合再開。ホイッスルが鳴る。

ブリーオフ。二本のスティックが重なり合う音がグラウンドに響く。やはり石岡はボールを取れない。しかし今度はさっきと違った。石岡はすぐに敵センターフォワードを追うのをあきらめ、

敵ライトインサイドマークにつく。ヤンチは敵との距離を少しずつ詰めながら下がる。タイミングを計っている。相手がヤンチを抜く動作に入る。左に大きくフェイント。右から抜きにかかる。対面したヤンチの左側だ。リーチいっぱい伸ばしたヤンチのスティックがボールを捉えた。

「マイボ」

石田が叫んだ。

ボールはヤンチから石岡へ。石岡がドリブルしながらボールをキープ。

敵ディフェンスは右へのパスラインをがっちりと押さえている。

相手センターハーフが石岡に迫ってくる。

石岡は冷静にレフトインサイドの藤井にパスを出した。

「森沼、上がれ上がれ」

武森が大声で言う。

藤井がボールをキープする。

真二は走った。

パスを出した石岡には敵センターハーフがぴったりとついていて。

真二は走った。

心臓がばくばくいっている。

真二は走った。

藤井の前の敵ライトハーフが間合いを詰めてくる。

パスコースがない。...真二以外には。

しかし藤井からパスを受けても、真二も敵ライトハーフの目の前だ。

走って先にディフェンスをかわし、それからパスを受けるしかない。

「藤井、タテに出せ」

真二は叫んだ。そのまま走り続ける。

ライトハーフを追い抜く。

藤井が縦方向にボールを出した。

ボールは敵ハーフの足元を抜け、エンドラインの方向に転がっていく。

ダメだ。

球が強すぎる。

追いつかない。

でも。

必死で走ったら。もっと必死で走ったら。もっともっと必死で走ったら。

追いつくかもしれない。

真二は走った。必死で。必死で。必死で。

このチャンスを逃したら、一点のビハインドで折り返すことになる。

それはキツイ。

走った。

心臓が破裂しそうだ。

足が壊れそうだ。

でも。走ったら... 追いつくかも...

ぶれる視線の向こうにボールが転がっていく。

追いつくかも...

敵ディフェンスが突然、走るのをやめた。

追い... つくかも...

石岡も、門口も、船木も...

追い... つく... かも...

藤井も...

ボールはエンドラインを割って、その向こうに転がっていった。

走っても、走っても。

追いつけないボールもある。

手が届かないボールもある。

真二が走るのをやめたとき、主審が長いホイッスルを鳴らした。

長かった前半ハーフ終了の合図だった。

「森沼。交替や。友藤。準備しとけ」

大きな試合のときだけ顔を出す監督のタケさんが言った。

この瞬間、真二の夏が終わった。

短いハーフタイムの間、戦術の打ち合わせをするチームメイトたち。

マークの確認。ディフェンスの打ち合わせ。フォーメーションのチェック。

レギュラー選手に冷水機から汲んだ水を配る補欠の後輩たち。

真二だけが選手たちのどの輪からもはずれていた。

予選のときからずっとそうだった。前半ハーフだけのレフトウイング。

本当の意味でチームの正念場である後半には、いつも友藤が起用された。

嶺南高校というチームの『左の翼』の半身は真二ではない。

今日だけは後半も出たい。今日だけは走りたい。

でも。

ハーフタイム終了を告げる笛。

レギュラーたちがグラウンドに向かった後のベンチ。真二はとり残されたようにそこに立っていた。

宮森が応援の声をはりあげている。

「がんばれ...」

「走れ走れ...」

しかし真二にはメンバーたちにかけるべき言葉が見つからない。

いくら頑張っても手が届かないものもある。

いくら走っても追いつかないものもある。

だけど...

だけど。

真二は唇を噛みしめて、ただ、黙って見ていた。

友藤、どうしてもっと走らない？

友藤、どうしてもっと必死になってボールを追わない？

友藤、友藤、友藤...

口からこぼれそうになるのは、ライバルに対するものばかりになりそうだから。

後半五分。

ショートコーナーから二点目が入った。

二校の実力差から考えるとダメ押しの一点だ。

勝つためには三点。

引き分けるためだけでも二点。

重い点差だ。

試合のほとんどが嶺南ゴール側で展開している。

あと三十分。あと二十分。あと十五分。あと十分。

逆襲の糸口さえ見つからないまま、時間だけが過ぎる。

あと五分。あと三分...

一点もとれないまま、残り時間は一分を切った。

イカロスの翼は天には届かない。

主審のホイッスルが鳴った。

その瞬間...

ヤンチは目を閉じた。

石岡は肩を落とした。

門口と船木は空を見上げた。

武森は泣き笑いのような表情を浮かべた。

相原はうなだれ、石田はホッケーマスクを脱ぎ捨てた。

真二はその瞬間の十一人の姿を忘れることはないだろう。

きっと。

ずっと。

インターハイ第一回戦、嶺南高校を2対0で下した石堂高校は、その年、準優勝を果たした。

「そう言えばお前、それからのこと全然知らんやろ。とりあえず大学でホッケー部に入ったんは山内さん、石田さん、石岡さん、相原さん、武森さん。船木さんは推薦テストの結果が悪くて一年浪人して、それでもやっぱり嶺南大のホッケー部に入った。

竹口と同じ学年で卒業までホッケーがんばったんやで、船木さん。

ヤンチさんらの後輩としてな。このへんまでは知ってるやろ？

俺はな... とりあえず大学のホッケー部には入ったけど、一年もたんかったわ。九月でケツわってもた。理由はな... 大学のチームは、俺らが知ってるあのチームやなかったからや。楽しかったやろ？高校のホッケー。でもな、大学は『勝つためのホッケー』をつきつめていったチームやってん。下手くそを許さん雰囲気みたいなのがあってな。そうになるとやっぱり辛いわな、B級の俺としては。

あと何やろ。みんなの近況かな、説明せなあかんのは。

竹口な、社会人になってもホッケー続けたで。実業団に入って、つい最近まで現役してたで。今では大学チームの監督やて。武森さんは神戸のクラブチームで現役続けてる。この前試合会場で見かけたわ。相変わらず元気やで、あの人。石田さんは四国のほうで仕事してるらしい。ヤンチさんは会社倒産したとかで結構大変みたいや。石岡さんは実家の会社継いだみたいやで。ときどき神戸で見かけるわ。相原さんはなんか相変わらずみたいやで。サラリーマンしてはるらしい。船木さんはつい最近まで京都のほうで仕事してて、最近神戸に戻ったみたいやな。門口さんは大学でごっつい勉強して公認会計士になってんで。考えられへんやろ？あの門口さんがやで。このへんは今ではぜんぜんホッケーやってないな。赤西や藤井も同窓会名簿でみかけたけど、最近ハスティックさえ持ってないんと違うやろか。

まあな、やっぱりドラマのようにはいかんわ。あの十一人、いや、十二人がまた集まってホッケーするみたいな状況。ありえへんわな。永遠にお前が欠けてるしな」

『僕』はここで言葉を止めた。

あのインターハイ予選の日のように、暖かい春の日。

静かな墓園。

遠くで鳥の啼く声。

線香の香り。

友藤は大学三年の夏、他界した。

どのような事情かは知らされてはいないが、彼は自らの命を絶った。

その知らせはご遺族の意向で同級生たちには伏せられ、『僕』はずいぶん経ってからチームメイトが鬼籍に入ったことを知らされた。

「お前、ずるいで。こんななったら、俺、永久にお前と決着つけられへんやん」

ライバルはもう何も語らない。

風が吹いた。冷たい風だった。

「もう遅いけど、やっぱな... だめやと思っても走らなあかんやん。追いつかんと思っても走らなあかんやん。走るのやめたら... あかんやん」

風が凧いだ。

「あの時な... 高一のあのとき... 二人でレギュラー争ってたあのとき... もっと練習せえって... もっと必死で走れって... とれるかとられへんかわからんボールでも必死になって走れって... 俺が言うてたら... これって違う結果になってたんかな？」

遠くでまた鳥が啼いた。

「...わからへんわな」

『僕』はつぶやいた。

「また来るわ。今度は誰か連れてくるから。会いたいやろ、みんなに」

本当ばらばらになった十一人に一番会いたかったのは、『僕』かもしれない。

『僕』のライバルは、今でもそこに眠っている。

走っても、走っても。

追いつけないボールもある。

手が届かないボールもある。

でも...

走ってみなければ、自分が追いつくのか、本当に手が届かないのか分かりはしない。

走る前にあきらめちゃいけない。

走ってみなければ結果はでない。

『僕』は『その日』の友藤に、それを伝えてあげたかった。

(本作は実話をもとにしたフィクションです。執筆の過程で現実の人物・学校・大会・事件などに創作を加えていることをお断りしておきます)